

神経現象学リハビリテーションの構想 ー行為創発へのオートポイエーシスの活用方法ー

著者	村部 義哉
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	32663甲480号
学位授与年月日	2021-03-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012777/

神経現象学リハビリテーションの構想

—行為創発へのオートポイエーシスの活用方法—

4110190003 村部義哉

本研究は、リハビリテーション医学分野において近年提唱されている「認知神経リハビリテーション（旧：認知運動療法）」の理論構想を、神経現象学的観点から解釈することによって、「神経現象学リハビリテーション」への再定式化を試みるものである。

認知神経リハビリテーションは、従来のリハビリテーション医学の治療理論や介入方法が、自然科学的研究成果に過剰に準拠している現状を批判的に吟味しつつ、現象学、特にオートポイエーシスのシステム論の積極的導入が試みられた治療理論である。しかし、近年の脳科学や認知科学、神経生理学などの自然科学的研究分野の躍進により、認知神経リハビリテーションの科学的展開もまた、従来の治療理論と同様、自然科学的観点に立脚した形態で推進されることとなった。

その後、リハビリテーション医学の治療対象である「人間」を外部観察的視点から測度化・定量化するといった臨床態度では、認知神経リハビリテーションの理論的展開が停滞する危険性が生じることへの懸念と自己反省によって、認知神経リハビリテーションは「行為間比較」へとその中核的理論構想を転換するに至った。行為間比較は、患者の過去と現在の行為に関する表象の比較によって、新たな行為表象の創発を促進する治療展開であるが、こうした展開はオートポイエーシスのシステム論における連続的自己の概念の積極的活用には他ならない。つまり、認知神経リハビリテーションは、行為間比較への理論構想の転換によって、結果的には、オートポイエーシスのシステム論を中心とする現象学的側面をより重視する理論構想として再定式化されたものと考えられることができる。

しかし、行為間比較の理論構想や治療展開とオートポイエーシスのシステム論との論理的关系性は十分に提示されている現状には無く、その論理的説明や具体的介入方法に関しては議論の余地が残されている状態である。

本研究は、認知神経リハビリテーションおよび行為間比較の理論構想と治療展開を批判的に吟味しつつ、オートポイエーシスのシステム論の観点から再解釈することによって、その理論的拡張を促進するものである。本稿は、各論点に則して8部構成の形式となっている。以下、各章の概要を提示する。

第I章では、神経現象学リハビリテーションの再定式化を開始する前段階として、リハビリテーション医学における科学の現状とその展開方法に関して論述した。リハビリテー

ション医学の対象が個性性、偶有性、歴史性を有する人間である以上、機械論的かつ要素還元的な自然科学的態度はリハビリテーション医学への適応性が乏しい。よって、リハビリテーション医学は、人間を複雑系・自己組織化系としての身体システムとして捉え、神経現象学的観点からの科学的展開方法が設定される必要性が高い。

科学哲学的には、特定の学問領域の科学的展開方法として、カールポパーの反証主義的アプローチやクーンのパラダイムシフトなどの概念が一般的であり、認知神経リハビリテーションにおいてもこれらの概念が導入されているが、これらは特定の反証事例の出現や一定の研究成果の蓄積により、既存の概念を破棄するものとなる。厳密性が求められる自然科学分野において、こうした収束的な科学的展開は重要であるが、様々な要素の複合体である身体システムを対象とするリハビリテーション医学においては、むしろ拡張的な科学的展開方法が必要となる。本研究では、こうした科学的展開方法として、ラカトシュのリサーチプログラムの概念を参考として、リハビリテーション医学における臨床・研究・教育への応用可能性を考察している。

第II章では、オートポイエーシスの基本概念と、認知神経リハビリテーションの理論構想の類似性を明確化することによって、神経現象学リハビリテーション独自の基本的理論構想を定式化する。リハビリテーション医学分野へのオートポイエーシスのシステム論の導入による最大の利点は、患者をオートポイエーシスの特性（自律性、個性性、境界の自己決定、入出力の不在）を有する「自己の身体の維持や拡張を可能とする構成要素の自己産出系」といった身体システムとして解釈することによって、従来の機械論的・要素還元的な治療展開からの脱却が可能となることである。また、その治療展開の論理的根拠として、「二重作動」「強度（変化率、触覚性力感）」「自発的相互無視」といった概念の活用形態を提示する。ここでの要点は、行為の創発（病理の改善）を目的とする身体システムの自己組織化を促進する背景に、患者の身体システム内の固有領域の拡張による位相空間としての身体の物理的・生理的变化を想定することである。

第III章では、認知神経リハビリテーションの歴史と現状の概要を整理しつつ、その主要概念を批判的に吟味するとともに、既存の解釈では論理化が不十分と判断される部分をオートポイエーシスのシステム論の観点から再解釈することによって、神経現象学リハビリテーションにおける主要概念として再定式化する。ここでの要点は、認知神経リハビリテーションの基本的治療展開である「認知過程の活性化による差異の認識」の意味内容の解釈の転換である。こうした治療展開は、認知神経リハビリテーションでは、「行為の予測と結果の比較場面での認知過程の活性化による物理的差異の認知的差異への変換」として設定されているが、こうした「認知的」な形態での認知過程の活性化では前述の「二重作動」「強度」「自発的相互無視」の活用には至らず、オートポイエーシスのシステム論に立脚すれば、理論上、行為の創発は促進されない。行為間比較への理論的転換により、「行為の最中における過去と現在の行為の表象の比較」といった「実践的」な認知過程の活性化形態が方法的に設定されてはいるものの、その論理的説明は十分には成されていない。

い。神経現象学リハビリテーションでは、基本的治療展開を「行為の最中における過去と現在の行為に対応する固有領域の強度的差異の類似化過程への認知過程の導入」として設定することによって、オートポイエーシスのシステム論との親和性の向上を試みている。

第IV章は、認知神経リハビリテーションの理論構想のパラダイムシフトとして提示された行為間比較の概要や基本的治療展開を確認しつつ、オートポイエーシスのシステム論の導入によって、その論理性の向上を促進すると同時に、神経現象学リハビリテーションの理論構想の基盤の形成を試みる。

第V章では、近年多くの学問領域での研究対象となっている「意識」に着目し、意識に関する仮説や機能、特性をオートポイエーシスのシステム論と関連付けることで、リハビリテーション場面への実践的導入を図る。意識の解釈は多岐に渡り、依然として明確な定義が与えられてない概念であるが、神経現象学リハビリテーションでは、「身体システムの固有領域の拡張過程における認知的・実践的認知過程の活性化の二重作動」として定義する。このように意識を定義付けることによって、神経現象学リハビリテーションの理論構想では、従来の認知神経リハビリテーションおよび行為間比較の治療理論と比較して、より論理的で実践的な治療展開が可能となることを示す。

第VI章では、現段階での認知神経リハビリテーションおよび行為間比較の治療理論と実践方法において、依然として論理的定式化が不十分な点を、オートポイエーシスのシステム論的観点から対応策を設定することによって、神経現象学リハビリテーションの理論構想と治療展開を定式化する。ここでは、認知神経リハビリテーションおよび行為間比較の理論構想においては、現時点では十分に体系立てられることなく散在している各主要概念の方法論的位置付けを行うとともに、神経現象学リハビリテーションの理論的実践やリサーチプログラムを展開するための雛型を設定している。

第VII章では、ここまでの考察によって定式化した神経現象学リハビリテーションの理論構想の実践例を疾患別に記載するとともに、各種疾患の病態仮説や治療方針を神経現象学的観点から提示する。

第VIII章では、神経現象学リハビリテーションの実践や普及に関して、現在の我が国のリハビリテーション医学の臨床、研究、教育の各現場にて発生が想定される問題点や課題を抽出するとともに、それらに対する対応策を提示する。

以上より、本研究は、認知神経リハビリテーションおよび行為間比較の理論構想を、オートポイエーシスのシステム論を中心とする現象学的側面から再定式化することによって、神経現象学リハビリテーションの理論構想の定式化を試みると同時に、リハビリテーション医学のリサーチプログラムの前進を目的とするものである。